

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 8 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770122

研究課題名(和文)18世紀フランス思想における科学と文学：ディドロの言説戦略の分析を起点として

研究課題名(英文)Science and literature in the eighteenth century in France

研究代表者

田口 卓臣 (Taguchi, Takumi)

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：60515881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀フランスの先鋭的な思想家(特にディドロ)の科学論の分析を通して、以下の2点を明らかにした。(1)ディドロの科学論は、生成期の近代諸科学に文学的な方法を通して介入し、「自然」と「人間」の関係をめぐる哲学を引き出していること、(2)ディドロの科学論は、17・18世紀の科学論に「幾何学から実験科学への革命」を見出してきた思想史的な通説に、異なる観点を突きつけるものであること、の2点である。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to explore science studies by Denis Diderot, one of the most radical French philosophers in the eighteenth century. In the result, two points were clarified：(1) Diderot's science studies represented his philosophy about relationships between nature and human beings, through literary interventions into modern sciences that were generated during that period；(2) Diderot's science studies provided us with a different point of view on general discourses which found "the great revolution from geometry to experimental sciences" in the eighteenth-century sciences.

研究分野：フランス文学

キーワード：ディドロ 近代科学 ニュートン ライブニッツ ルクレティウス リンネ モーペルチュイ 産業科学

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は、現在に至るまで何一つとして変わっていない。18世紀フランスの「科学」は長い間、次のような学問的先入見の標的であったし、今もそうである。すなわち、「17世紀西欧においては、自明な公理から出発して、厳密な「演繹 *déduction*」の体系を構築するデカルトの幾何学的方法と、実験と観察に基づく「帰納 *induction*」の手続きを通して、蓋然性の高い法則を抽出するベーコンの自然学的方法とが、互いに拮抗しあっていた。これに対し、18世紀フランスの進歩的な思想家たちは、後者の方法を採用し、その結果として、科学思想史上の大変革が実現されることになった」と。

本研究は、この歴史的先入見の背後に、「学説内容」の変革にのみ目を奪われる思想史研究特有の盲点が控えているとの考えに立ち、むしろ文学的な言説戦略を介して科学的認識を語ろうとする18世紀フランス思想独特の境位に注目することにしたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、思想、科学、文学の間で分野横断的な思考を展開していた18世紀フランスの思想家たちの独特な境位を捉えることであった。

具体的に言えば、本研究は、開始当初の段階で、以下のような目標を設定していた。第一に、ディドロはなぜ、『自然の解明に関する断想』の中で、様々な文学的形式や表現(寓話、隠喩、類比、黙説法、断章形式、詩的文体など)を介して、「自然」の観念を語ろうとしたのかを明らかにすること。第二に、ヴォルテールはなぜ、『哲学書簡』の中で、「書簡体 *lettre*」という言説戦略を介して、「科学」をめぐるデカルト主義とニュートン主義の対立の構図を描きだそうとしたのかを明らかにすること。第三に、ルソーはなぜ、主著『エミール』の「サヴォワの助任司祭の信仰告白」の中で、「告白 *confession*」という文学的形式を介して、「自然」のメカニズムの神秘について語ろうとしたのかを明らかにすること。第四に、ビュフォンはなぜ、大著『博物誌』の中で、わざわざ「類比 *analogie*」という修辞的技法を駆使して、「地球の理論」を展開しようとしたのかを明らかにすること、である。

上に掲げた四つの目的は、残念ながら、すべてが十分に達成されたわけではない。後で達成された事柄をより具体的に述べるが、少なくとも第三の目標は、未達成のまま残されてしまった。

3. 研究の方法

先述したように、「演繹主義から帰納主義へ」、「幾何学から実験科学へ」という歴史観の背後には、思想史研究者たちに特有の盲点が控えている。彼らのアプローチは、「学説内容」の変革に注意を奪われるあまり、文学的な言説戦略を介して科学的認識を語ろうとする18世紀フランス思想の特異性を見落としている。

そこで、本研究は、以下の観点から18世紀フランスの思想家たちの「科学的思考」を明らかにすることにした。(1)彼らはいかにして、先行の学説内容に批判的に介入するのか？(2)彼らはいかにして、先行の学問的方法(演繹主義/帰納主義、幾何学/実験科学)とは異なる思考の方法を創出するのか？(3)とりわけ文学的形式や技法(寓話、対話、告白、書簡、断想、パロディー等)を介して、いかにその新しい思考の方法を実現するのか？という3つの観点である。

18世紀フランスの思想家たちにとって、「学説」の無媒介的な実在は、決して自明なものではなかった。彼らの知的関心はむしろ、「語るという行為」そのものが、「語られる内容」にどのような変容をもたらすのか、という点にこそ差し向けられていたからである。

4. 研究成果

本研究はこれまで、(1)ディドロの自然哲学における「科学」と「文学」の交錯、(2)ディドロ、ルソー、モンテスキューらの哲学における「政治」と「文学」の交錯、(3)18世紀の西洋と東洋における思想と文学の比較、といった3点について一定の成果を挙げてきた。このうち、(2)と(3)については、当初の予定とは異なる形の成果を挙げる結果となったが、今後の研究の展開にとっての布石にもなった。事実、筆者が、(2)の研究の展開に基づいて申請した平成28~30年度科研費基盤研究(C)(課題名「18世紀フランス文学における「専制批判」の系譜：モンテスキューとディドロを中心に」)は、課題として採択されている。

上記の(1)に関しては、雑誌論文(1)、(3)、(4)、(7)、(8)、学会発表(3)、図書(1)を挙げることができる。雑誌論文5本は、『思想』誌上の連載論文であり、無事、完成に漕ぎ着けられた点で顕著な成果だったと言える。また、この連載を元に図書の刊行も実現でき、すでに社会的に高い評価を受け始めている。この意味で、十分な成果を挙げたと断定できる。

上記の(2)に関しては、雑誌論文(2)、(5)、(6)、(9)、(10)、(11)、(12)、(13)、学会発表(1)、(2)を挙げることができる。一つ一つの成果に関しては、それぞれ一定の水準に達しているが、各成果同士がどのように有機的な関係を取り結んでいるのかについては明らかにで

きていない。今後の課題である。

上記の(3)に関しては、学会発表(4)を数えるのみである。これ自体はさほど顕著な成果ではないが、フランスの大学において、国際的な研究者の目前で発表したという点で有意義だったと言える。

以上のリストを総括すれば、第一に、当初の計画を一冊の書物に結実させることができた点で、第二に、当初の計画から生産的に逸脱する方向性を得られた点で、そして第三に、今後の研究成果を国際的な研究者ネットワークに向けて発信できるようなきっかけと掴めた点でも、本研究は十分に満足に行く成果を挙げることができた、と結論づけられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

(1) 田口卓臣、「デイドロ『自然の解明に関する断想』精読(5)——不可知なものの承認、「後世」への自己開放」、『思想』1092号、岩波書店、2015年4月、pp.88-106、査読無。

(2) 田口卓臣、「Lettres の精神——思考の鋳型から離脱するために」、『2014年度国際シンポジウム 私たちはフランスの文明から何を学んだか』、富山大学人文学部フランス言語文化研究室、2015年3月、pp.3-17、査読無。

(3) 田口卓臣、「デイドロ『自然の解明に関する断想』精読(4)——流体、異種混交、理論的離脱」、『思想』1090号、岩波書店、2015年2月、pp.93-109、査読無。

(4) 田口卓臣、「デイドロ『自然の解明に関する断想』精読(3)——偏差、怪物、夢想」、『思想』1079号、岩波書店、2014年3月、pp.112-127、査読無。

(5) 田口卓臣、「どこにでも専制と破局は潜在する——モンテスキューの『ペルシア人の手紙』における統治と習俗」、『宇都宮大学国際学部研究論集』37号、宇都宮大学国際学部、2014年2月、pp.29-43、査読無。

(6) 田口卓臣、「予防的統治のゲームとその条件——デイドロの『不謹慎な宝石たち』におけるルイー五世時代の表象」、『思想』1076号、岩波書店、2013年12月、pp.213-231、査読無。

(7) 田口卓臣、「デイドロ『自然の解明に関する断想』精読(2)——寓話、再録、補遺」、『思想』1069号、岩波書店、2013年5月、pp.141-155、査読無。

(8) 田口卓臣、「デイドロ『自然の解明に関する断想』精読(1)——演繹主義と帰納主義の間で」、『思想』1065号、岩波書店、2013年1月、pp.6-22、査読無。

(9) (書評) 田口卓臣、「統治を根源から問い直し、最小悪の政治をたぐり寄せる——大竹弘二・國分功一郎『統治新論 民主主義のマネジメント』、太田出版」、『週刊読書人』、2015年3月27日号、pp.7-7、査読無。

(10) (報告) 田口卓臣、大橋完太郎、川村文重、寺田元一、「301年目のデイドロ——現実とフィクションを疾走するエクリチュール」、『cahier』14、日本フランス語フランス文学会、2014年9月1日、pp.6-10、査読無。

(11) (書評) 田口卓臣、「これをルソー回帰で終わらせてはならない 「啓蒙」の複線的な可能性を告知——ブリュノ・ベルナルディ『ジャン=ジャック・ルソーの政治哲学 一般意志・人民主権・共和国』、勁草書房」、『週刊読書人』、2014年5月9日号、pp.4-4、査読無。

(12) (対談) 逸見龍生、王寺賢太、田口卓臣、「今、デイドロを読むために(デイドロ生誕300年特集)」、『思想』1076号、岩波書店、2013年12月、pp.6-48、査読無。

(13) (翻訳) 王寺賢太、田口卓臣、「思想の言葉——フィリップ・ソレルス『幸福なデイドロ』」、『思想』1076号、岩波書店、2013年12月、pp.3-5、査読無。

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 田口卓臣、「後期デイドロにおけるフィクションの詩学」、日本フランス語フランス文学会、2014年5月25日、お茶の水女子大学。

(2) 田口卓臣、「Lettres の精神」、富山大学人文学研究会、2014年12月20日、富山大学。

(3) 田口卓臣、「<啓蒙>の炸裂——デイドロの言葉から思想史に分け入る」、中央大学人文科学研究所公開研究会、2015年2月4日、中央大学多摩キャンパス。

(4) 田口卓臣、「Prologue et / ou fiction : Akinari Ueda et Diderot」、オルレアン大学比較文学研究会、2015年11月20日、オルレアン大学。

〔図書〕(計 1 件)

(1) 田口卓臣、講談社選書メチエ、『怪物的思考——近代思想の転覆者デイドロ』、2016年、256頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/faculty/profile/profile_taguchi.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 卓臣 (TAGUCHI, Takumi)
宇都宮大学国際学部准教授
研究者番号：60515881

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：